

授業研究は子どものために行われるという見方が、資料の中にはあまり強調されていなかった部分なので、良い着眼点だと思います。  
授業研究をする時に「子どものため」というのをすべての教師が共通して意識することで、授業観を戦わせることは少なくなるのではないかと思います。

氏名： 学籍番号： 平成27年10月14日

① 題名： 授業研究会を通じた教師同士の学び合い

② 概要： 現在、世界で日本の授業研究が注目・導入されている。教師同士が学び合うことでより授業改善がなされている。現状の日本では時間が合わないなどの理由から形骸化しているケースもある。これを克服しようとしているのが<sup>大阪</sup>此上中学校である。具体的な学びの事例について教員同士が発表することで、協同的協業がなされており、「学び合う学校」が形成されている。

③ キーワード： 協同の学び、授業研究、教師の資質向上、学び合う学校、実践に基づいた。

④ メインメッセージ：

先生が学ぶ時、子どもも学習する。

→ 授業研究をする意義がこの言葉に込められている。

⑤ 内容： 「<sup>①</sup>世界の注目する」・「<sup>②</sup>学校の授業研究会」・「など」について  
日本の授業研究で学ぶ

① 授業研究によって今の教育が変わったことから、効果的な授業研究は教育現場を改善すると思った。

② 形骸化をいかに乗り越えるか、考えることができた。

⑥ その他： (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

6 授業研究はあくまで子どものために行われるべきものである。一定の根拠を持った話し合いをするためにも、記録は重要である。

⑦ 理由： (なぜそう思ったのか)

7 授業観を開かせてしまうことは教員の視野を狭くし、最終的には子どもの学びのためにならないと考えたから。

⑧ 結論： 具体的な事例に基づいた授業研究によって、教員間で協同の学びが促進され、子どもの学びが効果的なものになる。

⑨ 研究者の授業研究は教育現場とどのように関わるのがよいか。

自分の  
知った  
こと

学んだこと  
新たな疑問

氏名: 学籍番号: No: 平成27年10月14日

① 題名: 授業研究会を通じた教師同士の学び合い

② 概要: 世界が注目する日本の授業研究モデルのポイントは、参加者の学びを越えた活発な討論にある。これがうまく機能している学校こそが学習する組織であり、検討会を通して、教師の授業が変化、向上、成長していく。

③ キーワード: 授業メタモデル、学び合う学校

④ メインメッセージ:

教師にはそれぞれ授業観がある。これを論じるのは生産的ではないため、事実から出発するところがATLにある。そのため、授業者に質問するのは避け、参加が意見を申し合ふことがかかると生産的である。そして、年鑑や教科書のカベを越えて話し合いが成されるのが、学習する学校の姿である。

授業と教科  
相対的に  
よって授業観  
は変わる。  
正進化で構えた。

⑤ 内容: 「学校独自のスタイル」・「教師の成長」・「など」について

北里中学校では、管理職も同様に参加。司会者が輪番で回ってくるので、ユニークなスタイルが確立している。教務が作成する「まねびを訪ねて」の作成は、口頭列文字の日本文化に依るとの。

その教諭は、授業検討会を開いて、普段、授業について語る場面が少ないことを再認識。検討会を通して、授業に明らかな変化。

6 ⑥ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

教師には、それぞれ授業観があり、それを論じることは生産的ではない。参加した授業の事実から出発するところがATL。

具体的などの事例があるだろうか?

7 ⑦ 理由: (なぜそう思ったのか)

根拠のある発言が要求される。

自分の授業観を押しつけたのではなくまずは事実を確認する。

この点はいも鈍。とすると教師  
自分の授業観を押しつけては、  
ことがある。

8 ⑧ 結論:

年鑑や教科書にこそあらず、教師たちがどんどん発言し、学び合う学校こそ「学習する組織」である。

→ 授業研究以外の場でもどの教師とも話せる環境。

→ 具体的に、どの事例

氏名： 学籍番号： No: 1 平成 27 年 10 月 7 日

① 題名： 授業研究を通じた教師同士の学び合い

② 概要： 授業研究とは、教師による組織的な協働研究だ。授業研究の過程で教師は授業を見直すかや授業改善に向けた新たな見方・考え方を獲得する。協働研究は、学び合う学校文化を創り、学校を学習する組織にするために不可欠だ。協同の学びが成立している授業研究では、実施回数が確保されている・子どもの学びの事実を語る・授業者より参観者の発言が中心となる点が共通している。最も優れた現職教育は、人的ネットワークの中で授業に関するアイデアや経験を共有し、それについて小集団で議論し合うことによる学びとされている。

③ キーワード： 協働研究、学校文化、協同の学び、同僚性

④ メインメッセージ： 学び続ける学校文化をつくるには、継続的に、全員が学ぶ機会が必要だ。私は中でも「全員参加」というところに注目している。文化をつくるには、構成員全員の意識を変えなければならない。全員参加の機会があれば同僚性が育ち、やる気が尊重され、指摘や相談のしやすい雰囲気ができる。反対に、任意参加であれば「やりたい人はやる、やりたくない人はやらない」という文化の形成が助長され、教師集団を二分するのではないが、これは同僚性を阻害するものである。学び続ける文化をつくるためには、教師全員が学校の改善に貢献していると感じることが必要だろう。そして、全員参加の機会があるということは、全員に学び直しの機会があるということだ。これは教師としての成長にとってとても重要なことだと思ふ。

⑤ 内容： 「学校の共同研究で学び合う」 ・ 「 」 ・ 「など」 について

④で「全員参加」と書いたが、必ずしも全員が同じ授業研究に参加する必要はないと思ふ。もちろん北里中学校のよりに工夫して全員でできる研究会があるならその方が良いだろう。それができないなら、学年ごとや教科ごとでも、とにかく「研究に関わらない人がいない」ということが大切だと思ふ。『学習する組織』の中で、ピーター・センゲは次のように書いていた。「行動する人と別に、考える人がいるわけではない。行動するすべての人が考える人なのである。」授業研究は、「行動する人」が「考える人」であるためにデザインされるものだと思ふ。だから、当然に、参加するだけでなく、「参観者が学ばなくてはならない。これまで「実施回数も確保する」と「さらに中身のある議論へ」の話だが、「子どもの学びの事実を語る」ことの重要性については、自分の中でまだ理解しきれていないと感じている。ただ、事実を語ることには、議論と発表することの他に、教師としての成長の3側面（支える人・教える人・人間としての成長）における、支える人としての成長と教える人としての成長に役立つという効果があるのではないかと思ふ。理由は、子どもの変化によく気がつき、それに合わせた教え方をできるようにになると思ふからだ。

6 ⑤ その他：（自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど）

北里中学校の事例で、授業研究会を校外に向けて公開することには、どんなねらいや効果があったのか。

7 ⑥ 理由：（なぜそう思ったのか）

小学校と中学校が共同で研究会をしたという例を聞いたことがあり、北里中でも研究会を外部に公開することで、授業研究に変わる広がりがあったのではないかと思ふから。

8 ⑦ 結論：

授業研究をデザインする時に重要な点は、事実に基づいた有意味な議論を継続的に行うことによる、参観者が学ぶということである。これらが達成されている学校では共同の学びが起り、「学び合う学校」が創り上げられていく。形骸化を防ぐためには、参観者の学びようとする意識が大前提で、有意味な議論が行われるようになれば、参観者に自然と学ぶ姿勢ができてくると思ふが、すでに形骸化してしまっている学校では、はじめのきっかけづくりが課題だと思ふ。

・アメリカだけでなく、中国や韓国への授業は日本のそれとは異なっている。たまたまのケースが多い。(特に数学など)なので、見てみないと面白いかもしれません。

氏名: \_\_\_\_\_ 学籍番号: \_\_\_\_\_ No: 1 平成27年10月12日

① 題名: 授業研究会を通じた教師間の学び

② 概要: 教師による組織的な協働研究である「授業研究」は世界的にも注目されている。授業研究会(以下、研究会)は、教師の日々の実践を振り返り、学びを深める場である。研究会を通じて、教師は互いの実践を学び、授業の質を向上させることができる。また、研究会は、学校間の交流の場としても、大きな役割を果たしている。

③ キーワード: ④ 授業研究 ⑤ 研究会

④ メインメッセージ:

- ① 授業研究とは、教師による組織的な協働研究である。
- ② 研究会とは、教師各人の心の中にある「授業研究」の概念を共有し、その実践を振り返り、学びを深める場である。研究会を通じて、教師は互いの実践を学び、授業の質を向上させることができる。

⑤ 内容: ① 研究会の仕組み ② 研究会の意義 ③ 研究会の課題 ④ 研究会の未来

① 日本・外国の授業研究の比較分析による国際比較研究を行った結果、日本の「授業研究」がアメリカの学校教員や校長に対して有効であることが、多くの興味深い「良い授業研究」の事例を通じて明らかになった。これはアメリカの学校でも、これまで、日本の授業に学ぶことはなかった。

② 教師が持つ授業観を論じながら、授業の質をスタートラインにして、科学的なアプローチで実践を深める。

⑥ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

日本には「授業研究」という研究ジャンルはあるが、「自習の研究」は行われていない。

⑦ 理由: (なぜそう思ったのか)

日本では「授業」には力を入れているが、自習に関しては、何も考えられていない。また、現在学校教師は自習の力を伸ばす必要がある。

⑧ 結論: 自習が伸びるためには、学習意欲を高める必要がある。

「授業研究」だけでなく「自習研究」も行う必要があるのではないか。(新たな問い)

氏名:

学籍番号:

No:

平成27年10月7日

① 題名: 第6章 授業研究会を通じた教師同士の学び合い

② 概要: 授業の中で起きた具体的な学びの事実に基づいて、  
教師同士が気になったことや思ったことを話し合うことは、  
授業者のみならず参加者全員が教師としての資質の向上、  
授業の改善、授業観を豊かにし、子どもを知ることにつながる。

③ キーワード: 授業研究、教師の成長、学びの事実、現職教育

自分の感想

④ メインメッセージ:  
授業研究を効果的で意味のあるものにするには、1人で行うよりも大人数で、  
各自が原則を守って(最重)話し合うことにより達成されると分かった。  
授業研究そのものに対する理解や認識の共有は非常に重要であると思

⑤ 内容: 「学校の授業研究会で」・「  
学び合う<sup>ppp</sup>」・「など」について

制限時間を設ける、授業の発言記録、ビデオをもとにするこ<sup>ppp</sup>により具体的な  
議論や考えの共有ができる。授業者への質問は、事実を出発して生じた疑問であること  
意識し、質問、答えを質問者が考えることが必要である。立場や経年(経験)に  
事実から学ぶ姿勢を持つことで、教師同士が学び合い、学校の成長につながる。

⑥ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)  
研究協議会の記録をとることに気がついた。その場限りの学びにすぎず、  
何度も見返してその都度学び直すことが出来るため、回数を重ねることに確実な  
ステップアップ、成長につながることを考える。

→ 研究協議会では子どもの学びを扱うけれど、  
協議会をさらに見直すと教師の学びによる

⑦ 理由: (なぜそう思ったのか)

記録として保存しておくことは、そのとき授業者や協議会参加者のみならず、  
広く学びの材料として有効に活用できると考えるから。

→ さらに、協議会の様子について研究者なども学ぶことが出来る  
見どころ

⑧ 結論:

授業者 教師の個人、成長はもちろん、他の教師も学ぶことが出来る 授業研究会は、  
教師の教育活動を質的に向上させ、そのことにより子どもの学びを豊かに(広げる) 様々な  
良い点を備えている。

⇒ 子ども・教師・研究者という

色んな立場の人の学びによること

授業研究はただ行えば効果があるわけではなく、方法によっては悪影響を及ぼし教師の負担になるだけなので、「いかに取り組みを始められるか」という問いは非常に大切であり、考えなければいけないと思った。

裏にマインドマップを作っておきたい

氏名: \_\_\_\_\_ 学籍番号: \_\_\_\_\_ No: 1 平成27年10月7日

① 題名: 協同の学びをつくる

② 概要: 日本の授業研究は教師の学びのために必要であり、重要である。  
時間を制限したり、記録者を輪番制にしたり、研究テーマを1つに絞ることで  
続けていくことが可能にしたり、同時に教師が子どもの学びを捉え、授業の  
改善を目指すことで成長につながっている。

③ キーワード: 授業研究会 / 研究協議会 授業観

④ メインメッセージ:

「教師が成長する(学習する)」という点が授業研究の醍醐味。

授業をより良くしたいと願っているならば、まず自分が授業を噛み砕いて  
理解を深めなければならぬ。

⑤ 内容: 「実施回数の確保する」・「授業研究会の教師の成長」・「など」について

↓  
軌道に乗せることが難しい。  
1回しっかりやると、力尽きやすいためには...?  
→  
・自分の授業に 대해、他の人からコメントをもらうことで考え方が変わる  
・同僚の授業にコメントすることで、自分の授業のイメージがはまりやすくなる  
・先生の授業を見て知識・経験の蓄積

⑥ ⑤ その他: (自分の意見・疑問・質問・課題・分かったこと・思ったことなど)

Q. これまでまったく授業研究を実施できていなかった学校は、いかに取り組みを始められるか。「まずやってみる」に至るには...?

⑦ ⑥ 理由: (なぜそう思ったのか)

実施回数の減少に対する解決法はいろいろ考えられるが、まず行動を走らせるための方法はわからないと思ったから。

⑧ ⑦ 結論:

継続して行える授業研究のやり方を模索しながら、子どもの姿を見て、  
教師も成長を遂げる。これによって、授業と子どもが変わる。